

それ程貴重な楽器であるからこそ、家売ってまで買う人が出てくるのだ。古い、良い楽器には美術品や骨董品に似た財産価値も生まれ、専門のコレクターも出現する。アマーティやストラディヴァリがいの「贗ヴァイオリン」を作って儲ける詐欺まがいの行為も行なわれる。ただこの贗ヴァイオリンも結構良い音がすることがあり、案外捨てたものではないという。

どこの誰による何年の作、という事を明記して楽器の中に貼られるちっぽけなラベルでさえ売買の対象になる。その昔クレモナで使用されたラベルの精巧な複製を別の楽器に貼り、少しでもその売値をつりあげよとの試みは後をたたない。楽器の真偽とその価値とを鑑定する専門家もいるが、この方面の大家の発言が市井に及ぼす影響も、金額が大きいだけにあなどり難いものである。

こうしてヴァイオリンの値段は天井知らずとなるが、ちなみに一番安いものは中国製の「ケース付き二万円」といったものであろう。上限は数年前あるオークションで競り落とされた往年の名ヴァイオリンスト、ハイフェッツの愛器ガルネリにつけられた七億円という値段あたりだろうか。しかし一億円の楽器が一千万円の楽器の十倍良い音がするか、というと、そういうものでもない所がおもしろい。

ヴァイオリンには弓がなくては片手落ちだが、これがまた何と五千円から始まって千五百万円（一本の値段）程度まであり、数百万円の弓というのはそう驚くには価しない事なのだそうである。

ガイゲンバウアー

ムジークフェラインの一角に、世界に名を馳せるオーストリアのピアノメーカー、ベーゼンドルファー社

が大きな看板を出している。その右隣りに弦楽器の専門店がある。

ムジークフェラインの中には大小ふたつのコンサートホールがあるだけではない。各種音楽団体の事務局や、数々の貴重な資料を保存している資料室も所蔵あり。ウィーン国立音楽大学パイプオルガン科の一部もある。もともとウィーン国立音大の前身はムジークフェラインの中にあり、当初はここで授業なども行われた。その後スペース上の問題から移転を余儀なくされたが、パイプオルガンのように引越越し荷物として運搬できないものがそのまま残されたのだ。

この建物が建設されたのは一八七〇年の事だが、角にあるヴァイオリン店はその当時からのものである。「ホールではコンサートが催される。コンサートにはオーケストラが付きもの。オーケストラには弦楽器が必要不可欠だしプレイヤーの数だけでも馬鹿にならない。それだけの需要にはきちんとしたアトリエをもって対処すべし」というのがその理由。音楽の都ウィーンならではの洞察力である。

この店は単なる「代理店」ではなく、ヴァイオリンやヴィオラ、チェロ、そしてコントラバスまでを製作、販売、そしてそれらの修理も行っている。現在の店の主人オトマル・ラング氏は創立以来五代目に当たる弦楽器製作の専門家。店の看板も単純明快に「オトマル・ラング」である。もちろん販売している楽器は自作のものばかりではなく、このあたりは通常の専門店と同じである。

その上、何を隠そう、ウィーンフィルと国立歌劇場管弦楽団で使用されている弦楽器は、全てこのアトリエを継いできたマイスター達の手によって生まれたものばかりなのだ。アトリエで両楽団の楽器を製作したばかりでなく、そのアフターケアについても全責任を負っている。それも「心情的責任感」に由来しての事だけではなく、楽団との正式な契約にしたがって、リハーサル中に切れた弦はもちろん具合の悪いパーツの修理も、団員に対しては全て無料で行われる。レコーディング、そして演奏旅行の際にもマイスターが常にそばにつき添い、万一の故障に備えている。

ヨーロッパのオーケストラには多くの場合「楽団専有の楽器」が準備されている。ウィーンフィルの場合もこの例にもれず、演奏会は全て楽団の楽器を使用して行われる。国立歌劇場にも専用の楽器がある。つまりウィーンフィルのメンバーは、フィル用の楽器、オペラ用の楽器、そして自分の楽器、と常にその活動の場が変わるごとに楽器を持ち変えて演奏しているのだ。

オーケストラでは常に数十台の弦楽器が同時に使用されるが、このうちのほんの数台だけが値もつけられないようなとびきりの銘器で、残りはその辺のお店で誰でも買える並製品、というような状態では、決して良い音は生まれない。

この店の初代マイスター、レムベック氏が一八七〇年から九〇年にかけて製作した弦楽器を核とし、その代を継ぐハウデック、ポラー、フーバー、そして現在のラング氏の製作した楽器が加わる事によって、ウィーンフィルの弦楽器群が完成している。全ての楽器が「ウィーンタイプ」と呼ばれる、イタリア生まれの弦楽器とは少し違うもので揃えられており、これがあの魅惑的な音色が生まれる秘密のひとつである。

ウィーンタイプの楽器は、他のものと比較して楽器の胴体の持つふくらみが大きい。横板もたっぷり幅があり、楽器が相対的に厚くなっている。最大の長所は「室内楽の演奏により適している」事。ソロ楽器として会場の最後列まで音が通る、というよりは、合奏した時お互いの楽器の音がよく調和し合うのである。楽器に塗られるワニスの質もイタリア製のものとは少し異なっている。アルプスの北に位置するウィーンと南国イタリアでは、気候も全く違う。寒い、北の山国の気候に適したワニスとは、南のものに比較すると硬質で、色調もやや濃い。

ヴァイオリンやチェロなど、とかくこのタイプの弦楽器は十七世紀から十八世紀にかけてイタリアで作られたものが最高級とされている。(という事は、十九世紀末以降のものであるウィーンフィルの弦楽器は比

較的新しいものばかり、と云える）代表的なものは北イタリアのクレモナに住んでいたアントニオ・ストラヴィアリの楽器である。彼が製作した多数の楽器のうちヴァイオリン約五百四十台、ヴィオラ十二台、チェロ五十台が今日まで残っているが、どれも普通の人には簡単に手が出せない値段のものばかりである。

ストラヴィアリはとても勤勉だった。その上、楽器を製作する際にきちんと型紙を使用したり、他の職工と作業を分担して能率を上げたり、と、運を天に任せるだけの単なる名人肌タイプの人ではなかった。彼の師匠であったニコロ・アマティーという職人も名匠だったが、アマティーの楽器を更に開発し、ヴァイオリンという楽器を完成した功績は大きい。ストラヴィアリ以降、この楽器で改良すべき点は何も残されていない。

ストラヴィアリの銘器も、わが国の誇る（？）スズキバイオリンも、材料は自然の木（かえで及び松材）である。部品の接着は動物性にかわで行い、仕上げにワニスが塗ってあるだけだ。ワニス最大の役目は白木の楽器を手垢から守る、というもので、音質には人が言うほどは影響ないらしい。ラング氏の談話によると「ストラヴィアリが材料として選んだ木がクレモナ近辺でしか手に入らない特別なものだった、とか、ワニスが門外不出の極秘製品だった、などというまことしやかな話は、全て後世になってから楽器の値段を釣り上げるために考え出された作り話にしか過ぎない」のだそうである。「木は今も昔も変わらず生えているし、じつくりと自然乾燥さえさせれば少なくとも当時と同質のものを手に入れる事は十分可能。しかしそのためだけに何十年も時間をかける辛抱が現代人にはなくなってしまった」と、「オイルと自然染料を混ぜ合わせるワニスの製法も、当時は誰でも知っていた。今日同じワニスを使用しないのは、その製法があまりに面倒くさいから」なのだという。その上「このワニスは当時得られる最高のものであったが、色調、そして硬度などが果たしてそのまま何世紀も持続するかどうかは、誰にも予測できなかった。それと同様に、現在私が自分の楽器に使用しているワニスが今後何十年、あるいは何百年たつとどうなっているかは誰にもわからない。何でも良くつくく化学接着剤と、湿度に対する伸縮性も持ち合わせ、古くなって剥がれたら単に

貼りなおせばすんでしまふにかわの優劣についても即断は禁物。修理の事を考えると、接着したが最後、絶対に剥がれない糊は困ります」

古い優れた楽器に高い値段がつくのは、それが優れた設計のもとに、吟味された材料を用いて美術的にも非のうちどころのない完成度で仕上げられ、長い時間を経た後でも性能に何の減衰もなく、美術品としても最高級の形で残った、という稀少価値があるからだ。忘れてならないのは「古いことは古いが楽器としては価値のないもの」の方がずっと多い事である。古い、というだけでは億単位の値段は望むべくもない。一台のヴァイオリンを手作りで仕上げるには、約二百時間の工程が必要である。ラング氏の年間生産台数は三台から四台との事。愛情込めてつくられたこの二十世紀の楽器、二十世紀あたりにはどのぐらいの値段で売買されるのだろうか。クラシック音楽はあいかかわらず演奏されているだろうか。

ギター

世界を股にかけて活躍中のギタリスト、山下和仁^{ワカ}氏のソロリサイタルが一九八八年一月二十二日、ムジックフェラインの大ホールで催された。当夜の会場は満員札止めの盛況だった。「ギター一本でドボルザークの交響曲『新世界より』を全楽章弾いてしまふ」という山下氏のプログラムが、大変な前評判となったからである。

ギターが表現する音色や表現力の幅は、一般に想像されるよりもずっと広い。しかしそれらを最大限に活用するには、奏法の面から見てもまだまだ未開発な部分が多い。ギタリストがギターのために書かれた作品をギター本来の音色で弾くことに飽き足らず、未知の世界に挑む山下氏の試みは、まだ誰も踏み入った事の